

あの日、廃屋で
僕の身に起きた出来事

R18

ADULT ONLY

沼坂星作

これは僕が○学生の時
体験した話です。



当時ぼくが
通っていた学校には
ある噂がありました

近所にある
廃アパートの
一室に女の幽霊が
現れる…と

そんなアパートに
ぼくはあの日
友人とのゲームに負けた
罰ゲームとして単身忍び込む
事になったのです



早く
撮って帰ろう…



部屋の鍵はかかって
おらず、入ることは
簡単でした

中は荒らされた様子はなく
さっそくぼくは
証拠の写真を撮る
準備を始めました



それは
突然現れました

ガタッ

ド
ド

ド
ド
ド

そいつは
ゆっくりと姿を
あらわしました

体の大きさは
捕食者のそれであり
明らかに人ではありません

その尋常ざらなる姿に
悲鳴すらあげる事が
出来ませんでした

ド
ド
ド

ド
ド
ド

恐怖、怖れ……
そんな感情が
ぼくを襲いました

しかし
そんな感情以上に
支配するものが
あったのです





異様な姿といえど
それは間違いなく女の体

初めて見る母親以外の裸に
ぼくは視線を離すことが
出来ませんでした

ぼくは
目の前に迫る
巨大な裸体に

股間を熱く
怒張させていました
そう、欲情していたのです

ウウウ



ウウウ？

イルイル

そいつは近寄り
ぼくの顔を凝視して
きました

そして
突然の事に、驚き
動けないぼくを...



ハッ

人ではありえない
長く、肉厚な舌で
顔を舐め始めたのです

ベ
ロ
オオ

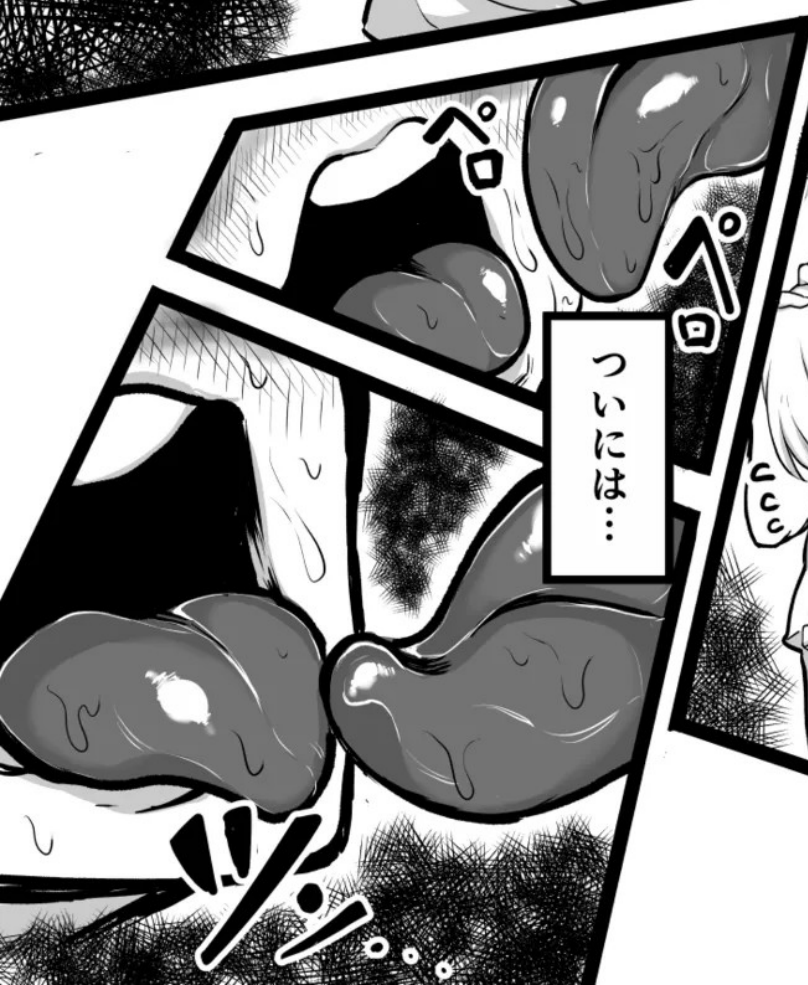
ぼくは必死に抵抗
しましたが
結局されるがままに

アウ

07.07%

うわ

ついには...





あろうことか
口の中に舌を
入れてきたのです

ぼくの
初めてのキスでした
はたして、それが「キス」と
言っているのであれば…

そうしてぼくは
口を塞がれた息苦しさ
その初めて感触に
頭がいっぱいになって
いきました

苦しさ
恍惚のさなか
朦朧とした意識で

1♡
1♡
...

私は無意識に
何かに縋ろうと
手を伸ばしました

ぐわ
ぐわ

ア
ア
...



ぼくは
目の前にある巨大な
乳房を揉みしだき
ました



怯んでる……？
そんな風に
見えたぼくは





この隙を逃しては
いけない、そう思い
乳首を力任せに
ひっぱりました



ぼくはその涙に
狼狽してしまい

思わず手を離して
しまいました
すると…



ぼくは無我夢中でおっぱいにむしゃぶりつきました



そうやって母乳の滴る大きな乳首を回ってぱいに頬張って勢いよく吸い続けていると...

ズク...

グッ
グッ
グッ

突然
そいつはぼくのことを
抱きしめてきたのです

ぎゅー

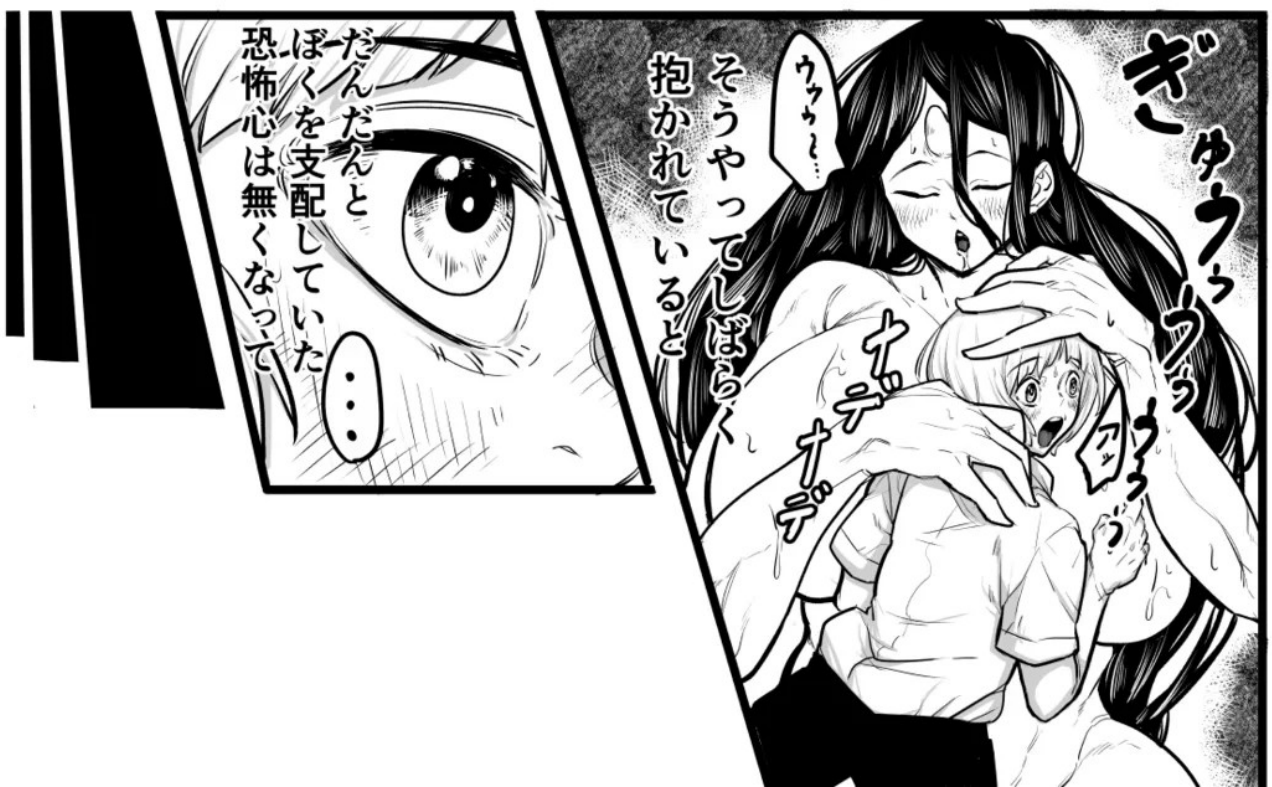


そこに敵意はな
くちろちろ

ぎゅー

ううう...
そうやってしばらく
抱かれています

だんだんと
ぼくを支配していた
恐怖心は無くなつて



残った性欲の赴くままに
ぼくは目の前のやわらかい体を
貪りました

ギッ
ギッ
ギッ

そんなぼくに
そいつはまるで
理想のお母さんが
子供を甘やかすみたいに
全てを受け入れてくれました

グニグニ

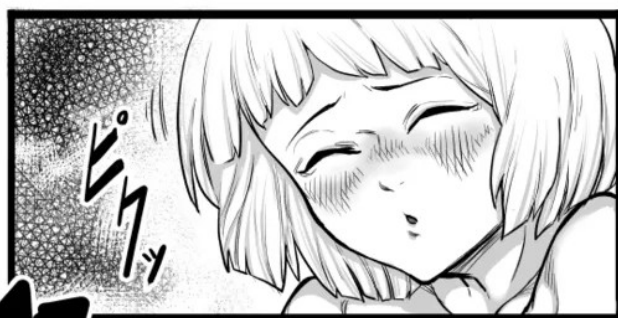
グニッ

ギョッ

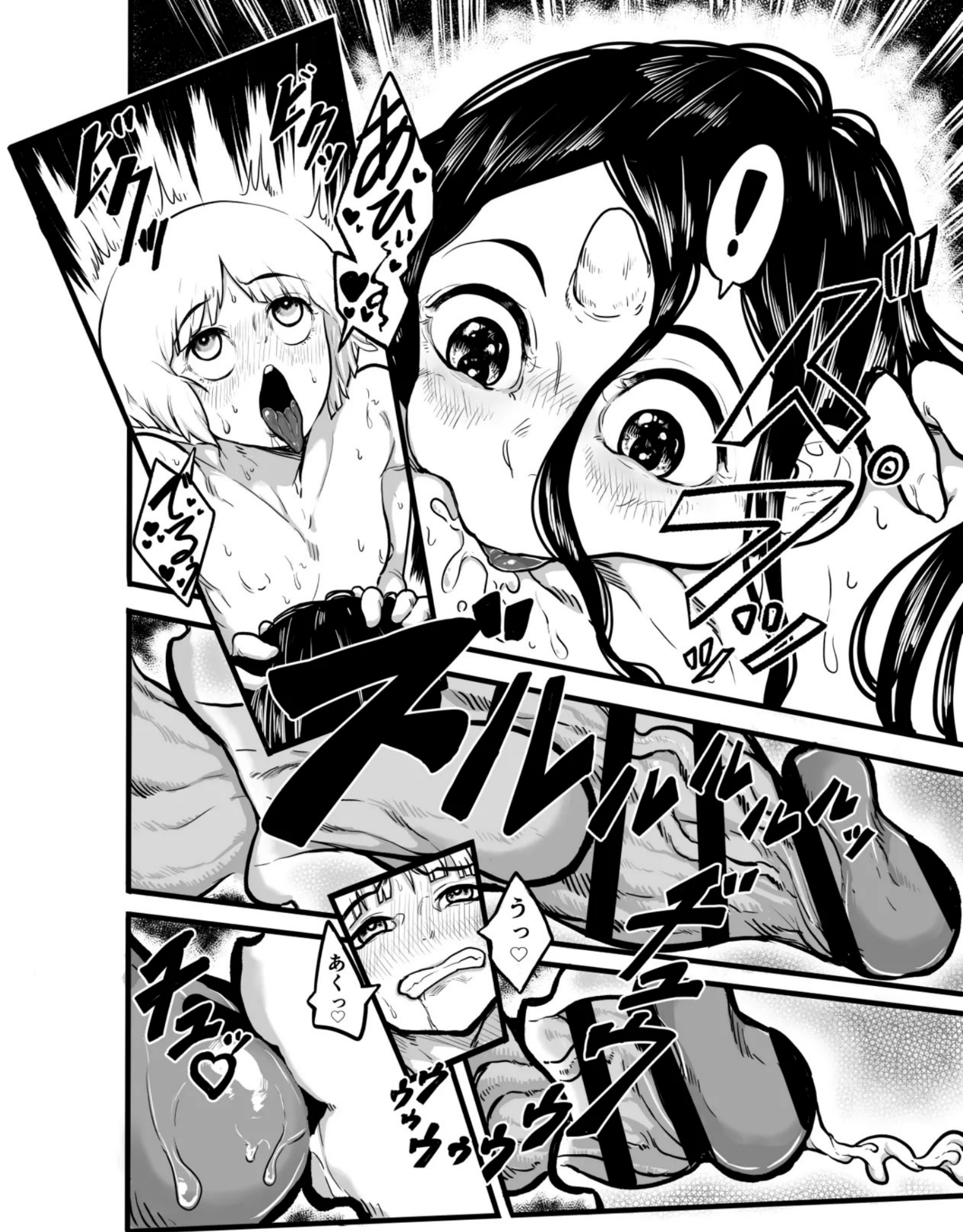
ロロ

そこからぼくは
性欲の赴くまま
色々なことをしました











あうっ
あ♡

き、きもち
よかった…

んあ…

ドク
ドク
レキ
レキ
レキ

た
た
た
♡

ア
ア
ア

ア
ア

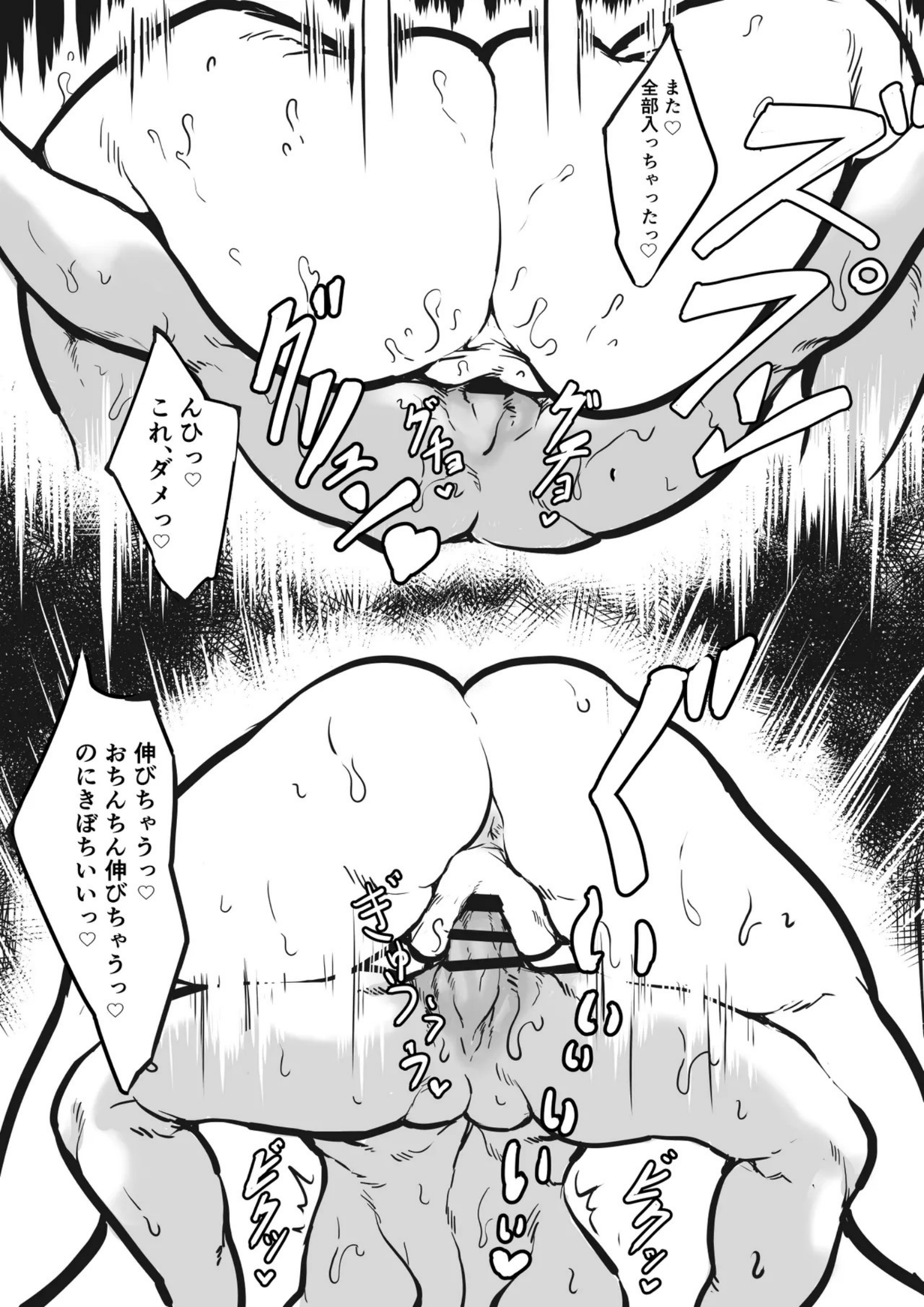
…?
?

ア
ア
ア

ア
ア
ア









で、でるっ♡

また
でちゃうっ♡

いっ♡

ゴッ♡

ゴッ♡

ゴッ♡

ゴッ♡

ゴッ♡















んくっはあっっ♡
おいしい♡
おっぱい全部飲むっ♡

ドク

んくっ

んくっ

んくっ

んくっ

んくっ

んくっ

んくっ

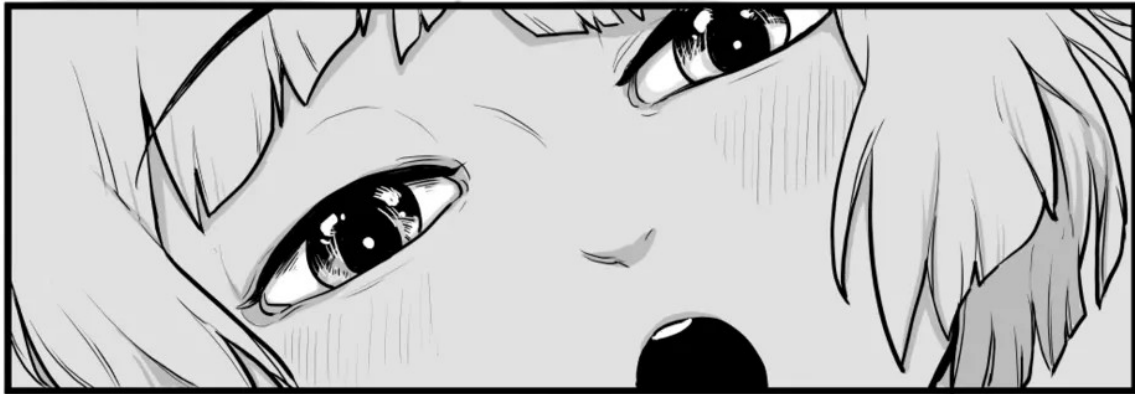
んくっ

んくっ

んくっ









分かった
いま行くっ！

あとがき

ここまで読んでいただきありがとうございます。
沼坂星作といいます。

この作品は知り合いのAさんから聞いた怪談を元に作りました。
せっかくなので、その話をここに書いておこうかな、と思います。

Aさんは子供の頃、住んでいた古いアパートに一人でいると、
黒くて大きな人が現れたそうです。

何かAさんに危害を加えるということは無く、ただ部屋を
徘徊するだけだったそうですが、Aさんはそれが怖く、
視界に入らないようにしていたそうです。

Aさんは母子家庭で、母親は夜遅くまで働きに出ており、
このことを相談しようにも、帰宅して疲れ切った様子の母親には
話すことは出来なかったといいます。

しかし、その状況はやはり嫌で、外で遊んでいたそうなのですが、
その頃、世間では通り魔的な殺人事件が起きたばかりで、
母親からは部屋で遊ぶよう言われ、渋々黒い人が徘徊する部屋で
遊んでいたそうです。

そんなある日、Aさんが携帯ゲーム機で遊んでいると、
何故かあの黒い人が、いつもより自分の近くにいるように感じる。

最初は無視していたらしいのですが、気になって顔を上げると、
自分の鼻先で、手のひらほどの大きな目がAさんを見つめている。

それは女性の目で、自分に対して敵意のようなものを向けている、
そんな気がする。

「そういうことじゃ、ないんだけどね…」

そんな、少し嘲笑するような男の人の声が耳元で聞こえたと同時に、
目はパッと消えてしまったといいます。

その日以来、Aさんの母親は帰って来ず、今も行方不明なのだそうです。

その後Aさんは、親戚の家に身を寄せることになったらしいのですが、
以降、黒い人は見なくなったといいます。

以上がAさんから聞いた話です。

今回描いたマンガとは似ても似つかない内容ではあるのですが、
大きい人、古びたアパートの一室、という部分が非常に惹かれる
ものがあり、こんな内容になりました。

長々と書いてしまいましたが、

改めて読んでいただきありがとうございます。

またの機会があれば、その時は是非、よろしくお願いします。

沼坂星作

